

# ラジオ放送開始 100年

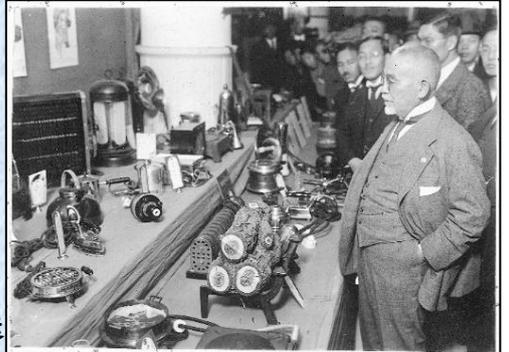
後藤新平が東京放送局初代総裁に就任した翌年の1925(大正14)年3月22日、ラジオの仮放送が実現しました。4ヶ月後の7月12日に、本放送がスタートします。後藤新平の強力なリーダーシップがあればこそその早業です。

## 1 初代総裁就任から放送開始準備

1923(大正12)年の関東大震災直後、ラジオ(当時は無線電話と称された)に関する法制が確立。翌1924年10月16日、社団法人東京放送局(NHKの前身)が設立され、後藤新平が総裁に就任した。

人材育成、社会教育に情熱を燃やしていた新平が、「無線放送」に限りない夢を託すこととなった。新平は歴代通相中における最大の科学愛好者だった。

世は、放送局という全然新奇な事業が、声望識見一世に高く、しかも新し物好きの新総裁を迎えたことを見て、これこそ真のはまり役だと喝采した。新平は放送局総裁に就任するや、ただちに23名の理事監事をもって組織する役員会を指揮して、諸般の準備を進めた。



## 2 仮放送と本放送

### (1) 仮放送 <<1925(大正14)年3月22日>>

いよいよ放送事業を開始しようと思っても、肝腎な放送機構は、米国に注文しても7~8か月を要する。放送局舎建設にも相当の期間を与えねばならない。これらに要する資金も調達しなければならない。しかし新平は、巧遅より拙速をもってこの際に処する途なりとした。幸い東京市の電気研究所が、無線電話研究用の無線電信電話機を所有していた。そこでこれを借用加工して、放送用機械を作り上げた。また放送塔は、芝浦の電気試験所跡の電柱を利用し、放送所は東京高等工芸学校の一部をもってこれに充てた。こうして最初は何から何まで借り物づくめで間に合わせ、予定通り、1925(大正14)年3月22日、仮放送の許可を受けて、業務を開始した。諸誼好きの新平が「これこそ本当の借り放送だね」と洒落飛ばしたのはこの時である。

【東京高等工芸学校】



### (2) 本放送 <<1925(大正14)年7月12日>>

仮放送実施の間にも、愛宕山の建築工事と、本放送機械の製作装備とは、夜を日に継いでその工程を進捗していった。本放送開始の前日の7月11日、宮内省の係官から御下賜金一封を下付された。新平は、この優渥なる思召しを戴いて感激に堪えず、翌日早朝本放送開始に先立ち御礼のため参内し、本放送開始式には御下賜金を放送室に飾って式を挙げ、同夜帝国ホテルにおける朝野名士招待席上において、主人としての挨拶の冒頭にこの光栄を披露し、主客共にこの事業の前途を祝福したのである。



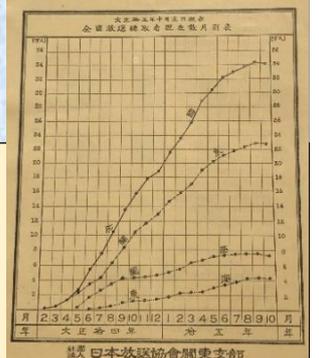
【愛宕山東京放送局】

## 3 ラジオ放送の普及

仮放送時、僅か5千人に満たなかったラジオ放送加入者数が、4か月後の7月12日の本放送時には、3万7千人、一年後の3月22日には、17万5千人と急激な増加を見せている。このことを新平は、「この数字的事実は、過去一年の間に於ける無線科学の発達が、我々民衆の生活を、最も自然的に改造し始めたということを実記するものでありますまいか。」と述べている。

【聴取者推移表】 調査時報

大正十五年十一月



### 【『無線放送に対する予が抱負』の一節】

仮放送で話したものと似た標題の冊子の中に、「ラジオの誤用を避けたい」という表記がある。今まで特に意識することはなかったが、地元新聞の記者が、本館展示資料紹介で指摘してくれたので紹介したい。

「此の文明の利器は最も周密なる科学的注意を加えて、極力混乱、誤用を避けねばならない。若し利用の宜しきを失したならば却って測るべからざる禍を招く。民衆的道德の模範を示したい。」100年先を見通した新平の面目躍如!